歴代教皇
～フランシスコ教皇（下）～

初代教皇はイエス・キリストの直弟子であるペトロ。それから脈々と引き継がれ、現フランシスコ教皇は第266代である。

私は今までに3人の教皇に謁見した。1人目は昭和49年にヨーロッパを巡礼した時、バチカンでパウロ6世に。バチカンに世界から巡礼で集まったグループが紹介される時、他のグループはその国名で紹介されたが、私たちは「ブロム広島」と紹介され、拍手も最も大きかった。それは私たちが世界最初の被爆国ということに敬意が払われたからであろう。そして退場される際は、最前列の私たちの所まで来られ、握手をして下さった。

2人目はヨハネ・パウロ2世。東京で謁見した。広島地区を代表された信徒が急病で参加出来なくなり、当時の野口司教から、まだ3歳だった長男も連れて行って良いと言われ、妻と3人で謁見した。

幼児はたった1人だったため教皇が長男を抱き上げ、その日の夜のNHKニュースで放映された。家で留守番をしていた姉たちはびっくりしたと笑う。

そして3人目は今回のフランシスコ教皇で、広島世界平和記念聖堂での「パブリックビューイング」である。これが謁見と言えるかどうかは別として、とにかく今回の各地での歓迎は大変なものだった。東京ドームのミサにしても人数は5万人を超え、売店で売られていた「フランシスコ教皇の日めくりカレンダー」などは千円のものに1万円のプレミアムがついたほどである。

そこで長女は森司教様が書いた「いのちの言葉」という本を買い求め送ってくれた。こちらはプレミアムなし、定価だったという。

「いのちの言葉」を読んで、ひとつびっくりしたことがある。そこにはフランシスコ教皇の言葉「私は神を信じていますが、それはカトリックの神ではありません。なぜなら、カトリックの神などはいないからです。私が信じる神はイエス・キリスト、つまり人間の姿を借りて、この世に現れた神です」と明言されている。ともすれば伝統的なものはどのようなものでも時代の流れに翻弄（ほんろう）され、本流を見失ってしまうことがありますが、いかなる時でも大切な源泉、つまり原点であるイエス・キリストに立ち戻り、キリストから光を仰ぎ、教会を刷新しようと呼びかけられたのだ。

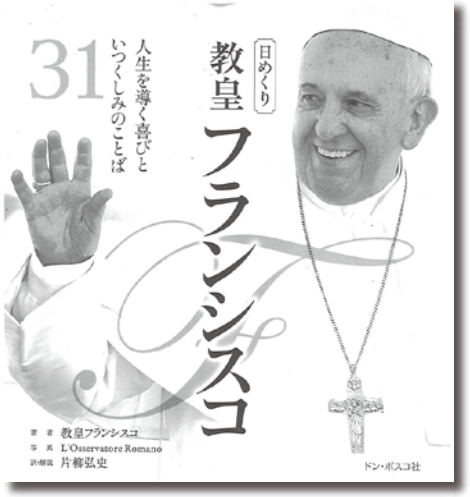
この言葉を心して生きねばと思う。「いのちという素晴らしい賜物は私たちが初めて授かった贈り物なのだ」。

とにかく平凡な自分の日々の生活を、どうすれば愛のよろこびの共同体になるかと「いのちの言葉」を読み漁（あさ）って見つけた。簡単な次の言葉である。

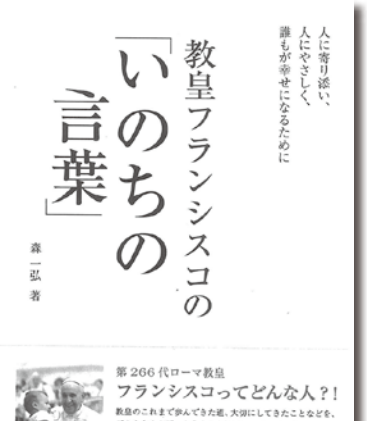
（1）許可を求める
「いいですか」
（2）感謝を伝える
「ありがとう」
（3）誤った時には
「ごめんなさい」

この3つの魔法の言葉を実行すれば、教皇が家庭は大きく変わると言われたことに留意して生きたい。

昭和49年に謁見したパウロ6世



フランシスコ教皇の日めくりカレンダー



フランシスコ教皇の「いのちの言葉」